

上代形容詞の範囲の再検討に向けて

村田 菜穂子*¹ 前川 武*²**A Reconsideration of the Range of Ancient Japanese Adjectives**Nahoko Murata*¹ Takeshi Maekawa*²

キーワード

形容詞、上代、万葉集、索引、コーパス

1. はじめに

これまで上代から近世に亘る日本語形容詞について調査を進めてきたが、その発端は、上代資料・八代集・中古散文作品から形容詞を採取し、各形容詞の語構成に関する語の質的分析、ならびに各形容詞がどの資料でどのくらい使用されているかという数量的な分析を行い、その結果を拙著『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』^(注1)において「古代語形容詞の語構成」として公表したことである。

その際に対象とした資料は以下のとおりである。

【上代資料】

『時代別国語大辞典上代編』^(注2)に立項されている形容詞のうち、東歌・防人歌に使われている東国語方言の語や複合形容詞中にのみその存在が確認される語を除き、万葉集・古事記（仮名書き部分）・日本書紀（同）・風土記（同）・続日本紀宣命・祝詞に用例のあるものを上代形容詞として認めた。

【八代集】

『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』『新古今集』

【中古散文作品】

『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『多武峯少将物語』『篁物語』『宇津保物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『和泉式部日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『堤中納言物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『讃岐典侍日記』『とりかへばや物語』

*1 むらた なほこ：大阪国際大学基幹教育機構教授（2019.7.5受理）

*2 まえかわ たけし：大阪国際大学短期大学部教授

過去の言語資料を調査対象とする場合の制約は時代を遡るほど大きく、上代における形容詞を採取する場合にも直面した大きな問題であった。

とりわけ、上代の言語資料は漢字列の日本語であり、どう訓読するのかという問題のほか、山口佳紀氏^(注3)が指摘されたように、奈良時代語と平安時代の和文語との間の「異質的非連続性」という問題に関しては、本研究をスタートした1990年代の後半には解決し得ない問題であり保留の状態のまま進めるほかなかったというのが実態であった。

そこで、やむを得ず、上記のような辞書に取り上げられた語（仮名書きのもののみ）を、上代資料から採取した形容詞とすることとしたのであるが、恣意的に選ばれた仮名書きの語彙のみを上代形容詞とすることには問題がないわけではなかった。

本来ならば、「万葉集を中心とする奈良時代の言語資料から帰納される言語体系を『上代文献語』』とするべきである。しかし、本研究をスタートした時点では現在のようにコーパスが無いことはもちろん、頼りとなる索引も出揃っていなかった。ところが、その後状況は一変し、①古典索引刊行会編『万葉集索引』^(注4) (2003)、②古典索引刊行会編『万葉集電子総索引 CD-ROM版』^(注5) (2009) (以下「古典刊行会」と言う)、③宮島達夫編『万葉集巻別対照分類語彙表』^(注6) (2015) (以下「宮島」と言う)と相次いで万葉集の索引が刊行され、さらに、国立国語研究所より④『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』^(注7) (2017) (以下「コーパス」と言う)が公表されるに至った。

そこで、本稿では、従来上代形容詞としてきたものとこれらの索引およびコーパスに出現する形容詞を対照し、その差違を検証するとともに、上代形容詞の範囲を再考する第一歩としたい。

2. 万葉集索引及びコーパスについて

(1) 万葉集索引及びコーパスの概要

検証に入る前に簡単に万葉集索引及びコーパスについて簡単に触れておきたい。

まず、索引だが、①は、西本願寺本を底本とし、廣瀬本の本文の内容を盛りこみ、その後の研究成果を反映させ、新訓を附した『補訂版 万葉集 本文篇』^(注8)を基にさらに校訂を加えた本文から、万葉集に見られる単語とその用例をすべて抽出し、語彙の検索をできるようにした索引である。また、②は、①を基として若干の修正を施し、歌本文のみを対象に、語彙索引、単漢字索引、歌番号索引を可能としたものである。そして、③は、②を基に独自の方針によって調整し、どの単語が何回使われているかを巻別に示し、対照できる表としてまとめたものである。

他方、④のコーパスは、西本願寺本を底本とし、新たに校訂を加えた小学館『新編 日本文学全集 万葉集 (1)～(4)』^(注9)の本文に基づき形態素解析を行い、全てのテキストに読み・品詞などの形態論情報を付与したものである。

つまり、①～④はいずれも西本願寺本を底本としている点は共通で、②は①とほぼ同等と考えられ、③は②をベースにしながらも独自の方針によっており、④は索引とは無関係

で一から本文を解析したものである。

(2) 万葉集索引及びコーパスの比較

最初に、それぞれに出現する形容詞の見出し語の数について見ると、既存の語彙表：249、古典刊行会：231、宮島：238、コーパス：236となっている。^(注10)

次に、万葉集のみを対象とした②③④の異なる2者間の共通語の数を見ると、「古典刊行会」と「宮島」では218語、「古典刊行会」と「コーパス」では206語、「宮島」と「コーパス」では215語となっており、「共通度=共通語の数/2者の語数のうち多い方の値」とすると、その値は87.7%~91.6%となり、「古典刊行会」「宮島」間で最も共通度が高い。

では、「古典刊行会」とそれを基にした「宮島」との差違はどこにあるのだろうか。

前者にあるが後者にはないものは以下の13語で全て「名詞+形容詞」形の複合形容詞である。

うらもなし(心無)、かほよし(顔良)、けながし(日長)、こころいたし(心痛)、こころこひし(心恋)、こころなし(心無)、こととし(言疾)、ことなし(事無)、すべなし(便無)、たびまねし(度遍)、つねなし(無常)、はださむし(肌寒)、ものこひし(物恋)

逆に、前者にはないが後者にあるものは以下の21語である。

あつし(暑)、いらなし(楚)、うらわかし(若)、かゆし(痒)、くさぶかし(草深)、くらし(暗)、さがし(険)、さとどほし(里遠)、さどほし(遠)、せばし(狭)、たどほし(遠)、つらし(辛)、ねたし(妬)、ほとほとし(殆)、まだし(未)、みねだかし(峰高)、むつまし(睦)、やすけなし(安)、やまだかし(山高)、よわし(弱)

このうち、次の14語の用例は、全て「山川を厚み」の形のいわゆる「ミ語法」の例である。

あつし(篤・厚)、うらわかし(若)、かゆし(痒)、くさぶかし(草深)、さがし(険)、さとどほし(里遠)、さどほし(遠)、せばし(狭)、たどほし(遠)、まだし(未)、みねだかし(峰高)、むつまし(睦)、やまだかし(山高)、よわし(弱)

また、次の7語の用例は、「暑けく」の形のいわゆる「ク語法」の例である。

あつし(暑)、いらなし(楚)、くらし(暗)、つらし(辛)、ねたし(妬)、ほとほとし(殆)、やすけなし(安)

このように見ると、両者の見出し語の選定方法の違いは明らかである。一つは、「古典刊行会」では「名詞+形容詞」形式の複合形容詞を認めようとするが、「宮島」では凡例にも明記しているように名詞についた形容詞は原則として切り離すという点である。もう一つは、前者がク語法・ミ語法を形容詞として認めないのに対して、後者は認める立場であるという点である。

また、一方の「コーパス」に目を向けると、「古典刊行会」にあつて「宮島」にはない13語の「名詞+形容詞」形の複合形容詞のうち、次の8語を「コーパス」では複合形容詞と

して認定している。

けながし (日長)、こころなし (心無)、ことなし (事無)、すべなし (便無)、
たびまねし (度遍)、つねなし (無常)、はださむし (肌寒)、ものこひし (物恋)

さらに、「古典刊行会」にないが「宮島」にある21語の「ミ語法」または「ク語法」の語のうち、次の4語を除く17語は「コーパス」では形容詞として認定されている。

さとどほし (里遠)、みねだかし (峰高)、やすけなし (安)、やまだかし (山高)

この4語のうち、さとどほし (里遠)、みねだかし (峰高)、やまだかし (山高)は、複合形容詞としては認定されていないが、それぞれ名詞と切り離して、とほし (遠)、たかし (高)、たかし (高)で認定され、やすけなし (安)は、やすし (安)の未然形+打消の助動詞「ず」の未然形「な」+接尾語「く」+助詞「に」の形で、やすし (安)として認定されている。

つまり、「コーパス」は、「名詞+形容詞」形の複合形容詞を認める傾向にあり、ク語法・ミ語法を形容詞として認めるという、3者の中で最も許容度の高い方針であることがわかる。

以下の表1は、3者間の違いがどの要因によるものかを一覧にまとめたものであるが、表中の○は当該資料に掲載されていること、×は掲載されていないことを示している。例えば、Aの3資料に○が付されているケースは、3資料に共通して出現する形容詞が198あることを表し、Bのコーパスに×が付され他の2資料に○が付されているケースは、コーパスには出現しないが他の2資料に出現する形容詞が20あることを表している。

また、BからGまでのケースの相違については、上述のミ語法・ク語法を認めるか、複合語を認めるかどうかに帰すると考えられるため、語数で示された形容詞のそれぞれがどの要因によるものかを表の右端4列のミ語法、ク語法、複合語 (「名詞+形容詞」形式の複合形容詞)、その他に分類してその数を表1に示した。

表1の中でその他が含まれるのがケースBとケースGであり、ケースBはコーパスにはないが他の2資料にはあるもの、ケースGはコーパスにはあるが他の2資料にはないもの

表1 万葉集索引、コーパスの比較及び相違要因別の分類

資料等 ケース	古典 刊行会 228語	宮島 235語	コーパス 236語	語 数	ミ 語 法	ク 語 法	複 合 語	そ の 他
A	○	○	○	198	-	-	-	-
B	○	○	×	17	0	0	5	12
C	○	×	○	8	0	0	8	0
D	×	○	○	17	12	5	0	0
E	○	×	×	5	0	0	5	0
F	×	○	×	4 ^{*1}	3	1	4	0
G	×	×	○	13 ^{*2}	2	0	8	4

* 1 : ミ語法、ク語法はすべて複合語であるため合計は合わない。

* 2 : ミ語法のうち1語が複合語であるため合計は合わない。

と、コーパス絡みということで特徴的であるため全語を挙げてみた。次のとおりである。

ケースB (コーパスにはないが他の2資料にはあるもの、下線部が「その他」に該当)
あかし (赤)、ありがほし (有欲)、いきづくし (息衝)、いへごひし (家恋)、いへどほし (家遠)、いろぶかし (色深)、えがたし (得難)、えし (良・好・善)、おとだかし (音高)、くふし (恋)、けやすし (消易)、ことはかなし (未詳)、こふし (恋)、さぶし (寂・淋)、にはし (急・俄)、はまぎよし (浜清)、みがほし (見欲)

ケースG (コーパスにはあるが他の2資料にはないもの、下線部が「その他」に該当)
いとまなし (暇無)、おもなし (面無)、かぎりなし (限無)、かずなし (数無)、きへやすし (消易)、くし (奇)、こころおそし (心鈍)、さびし (寂)、しし (茂)、つつみなし (恙無)、ねぶかし (根深)、まさし (正)、まなし (間無)

これらを見ると、まず、「名詞+形容詞」形の複合形容詞の認定基準については、コーパスにおいても揺れがあることがわかる。次に、「しし (茂)」と「おもなし (面無)」は、ミ語法でしか出現しないが、「おもなし (面無)」が「名詞+形容詞」形の複合形容詞であることを差し引いても、「しし (茂)」がミ語法を認めている「宮島」で見出し語として立項されていないことには疑問が残る。

では、「その他」に該当する16語について見ていく。

それぞれの語について調査した結果は以下のとおりである。

ケースB (コーパスにはないが他の2資料にはあるもの)

あかし (赤)

「あかし」には「あかし (明)」と「あかし (赤)」があるが、上代では赤色の意の例は見られない (小学館『日本国語大辞典』第二版、以下「日国」と言う) ことからコーパスでは「あかし (明)」と認定していると考えられる。

ありがほし (有欲)

- ・上代語。ラ変動詞「あり (有)」の連用形に助詞「が」が付き、さらに、形容詞「ほし」が付いた連語 (日国)
- ・コーパスでは、あり+が+ほしと考えて「ほし (欲)」で認定している。

いきづくし (息衝)

「いきづかし」の上代東国方言だが、コーパスでは「いきづかし」と認定している。ただし、出現形「いきづくし」の情報は保持している。

えがたし (得難)

「動詞の連用形+形容詞」形式の複合形容詞だが、コーパスでは複合形容詞とみなさず、「かたし (難)」で認定している。

えし (良・好・善)

「よし (良)」の古形 (日国) だが、コーパスでは「よし」と認定している。

くふし (恋)

「こほし(恋)」の上代東国方言(日国)だが、コーパスでは「こひし」と認定している。ただし、出現形「くふし」の情報は保持している。

けやすし(消易)

「動詞の連用形+形容詞」形式の複合形容詞だが、コーパスでは分離している。

ことはかなし(未詳)

原文は「ことはかもなき〜」でコーパスでは「ことはかも」+「なし」と認定している。

こふし(恋)

「こひし(恋)」の上代東国方言(小学館『新編 日本古典文学全集』、以下「新編全集」と言う)だが、コーパスでは「こひし」と認定している。ただし、出現形「こふし」の情報は保持している。

さぶし(寂・淋)

- ・平安以後は「さびし」の形で用いられる。(日国)
- ・コーパスでは「さびし」と認定している。ただし、出現形「さぶし」の情報は保持している。

にはし(急・俄)

- ・原文「にはしくも」、ニハシクは突然の意か。(新編全集)
- ・「にはしく」で副詞として立項(日国)
- ・コーパスでは、副詞「にはしく」と認定している。

みがほし(見欲)

- ・形容詞 シク活用(日国)
- ・「ありがほし(有欲)」と同様、「見る」の連用形に助詞「が」が付き、さらに、形容詞「ほし」が付いた連語と見るべきではないか。
- ・コーパスでは、み+が+ほしと考えて「ほし(欲)」で認定している。

ケースG(コーパスにはあるが他の2資料にはないもの)

きへやすし(消易)

「動詞の連用形+形容詞」形の複合形容詞だが、2資料では複合形容詞とみなさず、「やすし(易)」で認定している。

くし(奇)

- ・原文は「奇し御魂」、不可思議な精霊(新編全集)
- ・「くしみたま(奇御魂)」で名詞として立項(日国)
- ・2資料では、「くしみたま」で名詞と認定している。

さびし(寂)

ケースBの「さぶし(寂)」を参照

まさし(正)

- ・原文は「まさしに」、まさしく、ただし、シク活用形容詞の基本形が助詞ニを取った例はない。「君なしに」などからの連想で生まれた語形か。(新編全集)

- ・「まさしに（正）」で副詞として立項（日国）
- ・2資料では、「まさしに」で副詞と認定している。

以上の16語についての調査結果からわかることは次の2点である。

- ①「動詞の連用形+形容詞」形の複合形容詞の認定基準は資料によって異なり、また、統一的基準を設定するのは難しく恣意的になってしまうことは避けられない。
- ②コーパスの形態素解析には限界があり、「まさしに」の例のように文法的な解釈に疑義があるような場合の扱い方、「えし」のように別の語の古形とされているものの扱い方が妥当かどうかという問題がある。

3. 従来の上代形容詞と万葉集索引及びコーパスでの形容詞との比較

万葉集索引及びコーパスの実情と相互の関係が理解できたところで、従来の上代形容詞と万葉集索引及びコーパスでの形容詞とを比較する。

ここで、冒頭に記載した従来の上代形容詞の定義を以下に再掲する。

『時代別国語大辞典上代編』に立項されている形容詞のうち、東歌・防人歌に使われている東国語方言の語や複合形容詞中のみその存在が確認される語を除き、万葉集・古事記（仮名書き部分）・日本書紀（同）・風土記（同）・続日本紀宣命・祝詞に用例のあるものを上代形容詞として認めた。

2で見た万葉集索引及びコーパスと大きく異なる観点は次の3つである。

- ・『時代別国語大辞典上代編』に立項されている形容詞で、万葉集ならびに、古事記（仮名書き部分）・日本書紀（同）・風土記（同）・続日本紀宣命・祝詞に出現する語であること
- ・東国語方言の語を除くこと
- ・複合形容詞中のみその存在が確認される語を除くこと

当然、これらの観点は従来の上代形容詞と万葉集索引及びコーパスでの形容詞との差違に反映される。そこで、表1の要素に「古形」（別の語の古い形と考えられるもの）と東国方言（東国語方言と考えられるもの）を加え、また、複合語を名詞複合（「名詞+形容詞」形式）と動詞複合（「動詞の連用形+形容詞」形式）に分けて、表1と同様に語数で示された形容詞のそれぞれがどの要因によるものかを分類して表2に示した。なお、東国方言かどうかの判定は、新編全集に依った。

表2のうちケースLの従来の上代形容詞にあってそれ以外にないものは、万葉集以外の資料に用例があるものと考えられる。本来ならば語例を挙げて万葉集以外の用例であることを示すべきところだが、今回は数を挙げるだけに留める。

それ以外で注意すべき点は、表2のケースE, I, J, K, M, N, O、すなわち、従来の上代形容詞にはないが他の資料に見られるものである。

このうち、ケースE, I, J, M, N, Oの名詞複合（例：いへごひし（家恋）、なだかし（名高）等）、動詞複合（例：あひがたし（会難）、あへがたし（敢難）等）については、

表2 従来の上代形容詞と万葉集索引及びコーパスでの形容詞との比較及び相違要因別の分類

資料 ケース	従来 249語	古典 刊行会 228語	宮島 235語	コー パス 236語	語 数	ミ 語法	ク 語法	名詞 複合	動詞 複合	古 形	東 国 方 言	そ の 他
A	○	○	○	○	161	-	-	-	-	-	-	-
B	○	○	○	×	4	0	0	1	1	2	0	0
C	○	○	×	○	6	0	0	6	0	0	0	0
D	○	×	○	○	15	11	4	0	0	0	0	0
E	×	○	○	○	37	0	0	1	19	0	8	9
F	○	○	×	×	6	0	0	6	0	0	0	0
G	○	×	○	×	4	0	0	1	1	2	0	0
H	○	×	×	○	2	0	0	0	0	1	0	1
I	×	○	○	×	13	0	0	4	1	0	3	5
J	×	○	×	○	2	0	0	2	0	0	0	0
K	×	×	○	○	2	1	1	0	0	0	0	0
L	○	×	×	×	56	-	-	-	-	-	-	-
M	×	○	×	×	1	0	0	1	0	0	0	0
N	×	×	○	×	4 ^{*1}	3	1	3	0	0	0	0
O	×	×	×	○	11 ^{*1}	2	0	8	1	0	0	1

* 1 : ミ語法のうち名詞複合に含まれるものがあるため合計は合わない。

『時代別国語大辞典上代編』に立項されていない複合形容詞であるため、従来の上代形容詞の定義を、再検討する必要があると考えられる。また、ケースE, H, I, Oのその他については、個別に検討を行う必要がある。

ケースE, H, I, Oのその他に該当するものは以下の16語である。

あたし(他)、うはへなし、かあをし(青)、つれなし(由縁無)、

とこめづらし(常珍)、まうらがなし(真悲)、まかなし(悲し)、

まけながし(真日長)、ゆくりなし [以上ケースE]、くし(奇)

[以上ケースH]、あかし(赤)、ありがほし(有欲)、ことはかなし(未詳)、

にはし(急・俄)、みがほし(見欲) [以上ケースI]、まさし(正) [以上ケースO]

このうち、下線を引いた語は「2(2)万葉集索引及びコーパスの比較」で考察した事情によるものである。それ以外の10語について調査した結果は以下のとおりである。

あたし(他)、ゆくりなし

『時代別国語大辞典上代編』に立項されているが、かな書きの例がないため除外した。

うはへなし、ことはかなし(未詳)、かあをし(青)、つれなし(由縁無)、

とこめづらし(常珍)、まうらがなし(真悲)、まかなし(悲し)、

まけながし(真日長)

『時代別国語大辞典上代編』に立項されていないため取り上げなかった。

なお、日国および新編全集での記述は次のとおりである。

うはへなし

愛想がない。表面をかざらない。苛酷だ。(日国、万葉集の用例のみ)

ことはかなし(未詳)

未詳。原文には「言者可聞奈吉」とあり、その「言」は「事」の意で、仕方はないものか、解するのが通説であるが、コトに方法・手段の意を認め難いことから、『万葉集略解』に引く本居宣長説などは、「言」は「吉」の誤りでヨシ(由)の意であろう、とした。(新編全集)

かあをし(青)

(「か」は接頭語)、青い。みどりいろである。(日国、万葉集の用例のみ)

つれなし(由縁無)

表面何事もなげである。表面に出さない。そしらぬふうである。つれもなし。(日国、万葉集の用例あり)

とこめづらし(常珍)

常に珍しい。いつも新鮮で愛らしい。(日国、万葉集の用例のみ)

まうらがなし(真悲)

「うらがなし(心悲)」に同じ。(日国、万葉集の用例のみ)

まかなし(悲し)

ひじょうに愛(かな)しい。切ないほどにいとしい。(日国、万葉集の用例のみ)

4. おわりに

今回、従来上代形容詞として扱ってきたものと万葉集索引やコーパスに出現する形容詞を比較対照し、その差違を検証してきた。

その結果、これまでの調査で見落とししていた語がいくつかあることがわかり、ミ語法、ク語法を中心とする文法的な位置づけの問題、上代にしか用例のない古形を別語とするかどうかの問題、複合形容詞の認定の基準の曖昧さの問題もあらためて認識することとなった。

また、コーパスの開発が進む中、その形態素解析に問題がないわけではない。

それに加えて、上代語の研究が進み、『時代別国語大辞典上代編』に見出し語として挙がっていないが、上代文献に確例のある語の存在も指摘されている。^(注11)

このように、今回の考察で従来定義してきた上代形容詞の範囲を見直さざるをえないことが明確になった。今回は問題提起だけに留めるが、今後、形容詞語彙の語構成に関して現時点で最も詳密であると考えられる蜂矢真郷氏の論考^(注12)を参考にしながら上代形容詞の範囲の再検討を行い、上代語と古代語の関係などこれまで論じてきたことを再検証したい。

注1 村田菜穂子著 [2005・11 和泉書院]。

国際研究論叢

- 注2 上代語辞典編修委員会編 [1967・12 三省堂]
注3 『古代日本文体史論考』 [1993・4 有精堂出版]
注4 [2003・2 塙書房]
注5 [2009・12 塙書房]
注6 [2015・1 笠間書院]
注7 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html (2019年6月30日確認)
注8 佐竹昭広他著 [1998・8 塙書房]
注9 小島憲之他校注／訳 [1994・8～1996・7]
注10 見出し語については、意味の違いに関係しない読み方・発音の違いは同一語とみなし合併して採ることとした。同一語・別語の認定は『古語大事典』〔小学館〕・『日本国語大辞典』〔小学館〕に拠った。たがって、清濁の発音の違いを区別している「古典刊行会」「宮島」の見出し語数は元の見出し語数よりも少ない。また、間に助詞を介する語については、助詞を除いた形を見出し語とした（例：うらもなし→うらなし）。
注11 蜂矢真郷「上代の形容詞」〔『萬葉』212号、2012・6〕
注12 『古代語形容詞の研究』 [2014・5 清文堂出版]、「上代を中心とするシク活用形容詞の語基と語幹」〔『国語と国文学』96-5、2019・5 明治書院〕